けいおん！あったかい日常

SIN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けいおん！あったかい日常

【Ｎコード】
Ｎ６２４１Ｚ

【作者名】
ＳＩＮ

【あらすじ】
中学時代にいじめにあい心に深い傷を負った・・・地元の高校には行きたくなかった為悩んでいたところ、母親に勧められたのが隣町の桜ヶ丘高校。受験を受け合格し入学したまでは良かったが・・・この高校は実は女子高で、俺の年から共学になり今年の男子生徒は俺一人と言うことだった・・・「なんじゃそりゃあああああ！？」。だけど俺はここでかけがいのないものを手に入れるのだった。

プロローグ（前書き）

小説書き始めました、もの凄く素人で更新も不定期ですがあたたく見守っていて下さい。

プロローグ

春は出会いの季節・・・・

訪れるのは友情なのか・・・・

それとも恋なのか・・・・

凄く不安だけど

それと同時に少しだけ期待してしまう自分がいる

過去に嫌なこと、怖いこと、傷ついたこと・・・・

泣きたくて逃げ出してしまいたい思いもあったけど・・・・

ここで俺は出会えたんだ

本当の友達に・・・・

大好きな人に・・・・

これから始まる物語は

この俺野上慎司(のがみしんじ)と

この学校で出会った少女達の

いつもの日常だけどとてもあったかい物語

けいおん！あったかい日常

ＬＩＶＥｓｔａｒｔ！！

プロローグ（後書き）

これから頑張ります

ＬＩＶＥ１　高校入学！だがしかし・・・（前書き）

ようやく本編スタートです、ではお楽しみください。

ＬＩＶＥ１　高校入学！だがしかし・・・

ピピピッ　ピピピッ

目覚まし時計の音を聴きながら眠い目を擦り
俺は目を覚ました・・・

「ふぁ～・・・ねむ・・・」

ぐ～っと背伸びをしてほっと一息。そしてハンガー
に掛けてある制服に手を伸ばし着替えを始める。

「慎司～降りてらっしゃ～い！朝ごはん出来てるわよ～！」

「今いくよ、母さん」

一階から母さんの声が聞こえると俺はすぐに返事を返し
下に降りた。

「おはよ、母さん」

「慎司～お・は・よ～う？」

そう言うと母さんはここぞとばかりにぎゅ～っと抱きしめて来る。

「母さん・・・いい加減抱きつくの止めない？流石にこの年じゃ恥ずかしいよ・・・／／／」

「もう～良いじゃない、スキンシップよ！スキンシップ！」

これは俺の母さんこと野上　紫《のがみ　ゆかり》の日課である。朝の挨拶の時と家に帰って来た時に必ずハグをする、まあ嫌いじゃないんだけどね。

「さあ、時間も時間だし早く朝ご飯食べちゃいなさいね」

「うん、わかった」

そう言って椅子に座って食べ始める、うん・・・今日の味噌汁もいい味だ。

「そういえば桃姉は？」

「桃音はもう学校にいったわよ、友達と課題をする約束があるんですって」

「ふ～ん、そっか・・・」

桃姉。本名は野上　桃音《のがみ　ももね》俺の姉さんだ。凄く優しくて勉強も運動もなんでもござれの完璧超人、俺とはまったく対象外・・・

「慎司・・・」

そんな事を思っていると母さんが心配そうな顔をして俺に話しかけてくる。

「辛い事とか苦しい事があったら絶対に言いなさい、必ずあなたの力になるから・・・」

「うん・・・ありがとう」

いかんいかん、高校デビューだというのに暗い雰囲気になってしまった。母さんにお礼を言うと残りのおかずをかっこみ鞄を持って立ち上がる。

「じゃあ母さん、行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい」

玄関前で他愛のない会話をしてドアを開け学校へと向かった。

自己紹介が遅れたけど俺の名前は野上　慎司《のがみ　しんじ》今年から私立桜ヶ丘高校に
入学した、なんで地元の高校じゃなく隣町の桜ヶ丘高校を受験したかというと・・・早い話地元だと中学時代の連中がいるからである。
実は俺は中学時代にイジメを受けていた、最初の頃はなんともなかったけどだんだんエスカレートしてきて中二の前半は不登校だった。中三の後半からまた学校に行きはしたけどイジメが無くなることはなく・・・

「なんでお前が来てるんだよクズ！」

「なんだよお前？まだ死んでなかったのかよ？ギャハハハ！」

こんな始末である。ちなみに先生に相談しても何にもしてくれないし止めもしない、何やってるんだろうね？
そんなこんなで受験シーズンが来て悩んでいたところ母さんが教えてくれたのが桜ヶ丘高校。隣町なので地元の連中が来ることもあまりない、
ぶっちゃけ地元から離れられればどこでも良かったので無我夢中でその
高校を受験した。だけどそれがのちにとんでもないことになろうとは・・・

「さてと、早く電車に乗らないとな」

駅につき電車に乗るためホームに急いでいると・・・

「キャッ！？」

「おわっ！？」

誰かとぶつかってしまった、そのせいで荷物の中身がばらけてしまう。

「ごめん！俺の不注意で・・・」

「いいんですよ、私も前を見ていませんでしたから」

そう言うと女の子なにっこりとほほ笑みそう言ってくれた。

ていうかこの子・・・かわええ・・・

ハッ・・・！俺は何を・・・

「では私はこれで・・・」

「あっ・・・うん、ごめんね」

最後に返事を返した後、その女の子と別れた。

「・・・名前、聞いておくべきだったかな・・・」

まあ今の俺にそんな勇気ないが。

「って!?俺も電車乗らないとまずいじゃん!?」

電車はもう駅のホームまで来てる!走らないと間に合わない!ま・ず・い

「うおぉおおおお!間に合えぇえええ!!!」

俺は全力疾走でホームまで走って行った。※皆は駆け込み乗車はやめようね

「は〜っ・・・着いたぜ・・・」

そして着きました！桜ヶ丘高校！やれやれだ・・・

「まずは自分のクラスはどこか確認を・・・なんだあれ？」

クラス表の確認をしようと歩いていたところ、一人の人影を目撃する。

なんかうずくまっているように見えるけど・・・

「話しかけなくても・・・いいよな・・・」

人に話しかける勇気がないと言っておこう、イジメの事もあって人と話すのが少し苦手になってしまったからだ。

だけどもし体調不良だったりしたら・・・あ～っもう！きりがないな！

「あの・・・どうかしたの？」

俺は意を決して話しかけることにした。小さいころから困っている人が

ほっとけなくてよくお人よしって言われてたっけ・・・

「んっ？君は誰？」

その人は女の子だった、声からして体調不良とかじゃなさそうだけど・・・

「いやさ、なんかうずくまっているようなきがしたから気になって・・・
ところでさ、そんなところで何してるの？」
「えっとね、テントウムシをみていたの！」
「へっ？テントウムシ？」
「うん！すっごく可愛いよね～！」
なんか変わった子だなというのが第一印象、今時こんな子がいるのかと
正直驚いた。
「あっ！そうだ、自己紹介！私の名前は平沢　唯《ひらさわ　ゆい》よろしくね！」
「えっ・・・ああ・・・よろしく」
なんか結構マイペースな子だな・・・この子のペースに全然ついていけない・・・
「ねえねえ！君の名前も教えて！」

「えっ！？俺！？なんで！？」

「だってせっかく知り合いになれたんだし、何より今日から私達同じ学校の
仲間でしょ！」

「仲間・・・」

久しく忘れていた言葉・・・もう言われる事はないと思っていたのに・・・
目の前にいる女の子はなんのためらいもなく言葉を返してくれた。

「あれ？どうかしたの？ハッ！？私まさか変な事言った！？」

「あっ！いや、そうじゃないよ！」

なんだかうれしいな・・・なんて心の中で思っていたり・・・

「えっと自己紹介がまだだったよな、俺の名前は野上　慎司だ、よろしくな」

「野上　慎司君か～、う～んそれじゃ・・・あっ！しん君だね！」

「えっ！？なぜにしん君！？」

「え～っとね、しん君だからだよ！」

「いや余計意味が解らないよ！？平沢さん！？」

平沢さんは初対面の人にあだ名を付けて話す子なのか！？だとしたら結構
変わった性格だな・・・そんな事を思っていると

「しん君、私の事は唯で良いよ」

この子は何を言ってやがりますかぁあああああ！？

「なんで初対面の俺に呼び捨てで呼ばせる！？て言うかもっと自分を大切に
しなさい！」

「オーバーだよ～しん君」

「しかしだな・・・はあ・・・分かったよ、ゆっ・・・唯」

結局は唯の言葉におれちまった・・・（ー＿ー；）

「唯～何処なの～！」

「んっ？誰だ？」

「あっ和ちゃんだ、こっちだよ～！」

「唯、やっと見つけたわ、一人で勝手にふらふらしないの！」

「えへへ～ごめ～ん」

「もう・・・あら？この人は？」

「さっき友達になったしん君だよ！」

「しん君・・・？」

「ああ、俺の名前は野上　慎司、よろしく」

「なるほど、だからしん君なのね・・・ごめんなさい、唯には
悪気はないの」

「いいよ、別に嫌じゃないし」

「そう言ってくれると助かるわ、私の名前は真鍋　和《まなべ　の
どか》よろしくね」

「うん、よろしく」

そう挨拶を交わしていたら唯が

「ほら～早くクラス表見に行こうよ～」

「ってこら！唯！待ちなさ～い！」

「早っ！？てかもうそんなところまで！？」

もうクラス表が張り出されている場所まで移動していた・・・
どんだけマイペースなんだよ・・・

場所は変わって教室、運良く唯や真鍋さんと一緒のクラスになることが
出来た。
それは良かったが・・・なんだろう、何だか凄く違和感がある・・・

「はいったばかりでまだ緊張してるんじゃない？」

「そんなもんかな・・・」

「しん君、リラックスリラックス～」

二人の優しさが身に染みるぜ・・・そんな事を考えている時に校内
放送が流れた

「え～新入生の野上慎司君、新入生の野上慎司君、至急職員室まで
来て下さい」

へっ！？俺！？

「なんで野上君が？」

「しん君何かしたの？」

「そんな訳ないだろ・・・でも何か分からないからちょっと行って来る」

「「いってらっしゃい」」

二人に見送られ俺は教室を後にした。

～職員室～

「失礼します・・・」

「おお、来たか」

そう言って出迎えてくれたのは長年教師をしてきたような男の先生、他にも
校長先生や教頭先生らしき人もいる。

「あの、先生・・・俺何か問題を起こしたんでしょうか・・・」

オズオズと先生に聞いてみる。
「いや、君が問題を起こしたという訳では無い」
ホッ・・・良かった、でも待てよ？それじゃなんで俺は呼び出しされたんだ？
「実は・・・今回の入学生についてだが・・・大変言いにくい事なんだが・・・」
「はい・・・」
「・・・・・・・・・・・・実は」
「？」
「男子は君一人だけなんだ」
「・・は？」
「もう一度言おう、男子は君一人だけなんだ」
「うそぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！？」
俺の絶叫が職員室中に木霊する、えっ！？今先生なんて言った！？
男子生徒が

俺一人だけだって！？

「そっそそそそそそれって、どどどどどどどう言う事ですか？」

「君の年でこの桜ヶ丘高校が女子高から共学に変わったのは知っているね？」

え？そうだったの？無我夢中で勉強していたからそんな事分からなかった・・・

俺の反応とは余所に話は続く。

「だがこの事が、ちょっとした手違いで一部の学校には行きとどかなかったため

君以外の男子生徒が受験しなかったんだ・・・」

「君には不便な思いをさせてしまうかもしれないが、何か困った事があれば

先生に相談しなさい」

先生は笑顔でそう言ってくれた。

「あ・・・はい・・・では失礼します・・・」

そう言うと俺は職員室を後にした。

「ふう・・・・

なんじゃそりゃああああああああああああああああああああああ
ああああああああああ
あああああああああああああああああああ！！？？」

勢い余って叫んでしまった・・・俺の高校生活は前途多難の様です・・・

ＬＩＶＥ１　高校入学！だがしかし・・・（後書き）

なぜ唯達が主人公を見て驚かなかったのか、その理由は唯達の学校にはちゃんと届いていたからです、こんな感じで進めていきます。
では！

ＬＩＶＥ２　まさかの一人・・・でも友達は優しいね（前書き）

二話目です、まだ軽音部には入りません。キャラは出てきますが・・・

ＬＩＶＥ２　まさかの一人・・・でも友達は優しいね

「絶望が・・・俺の・・・ゴールだ・・・」

机に突っ伏したまま俺は訳の分からんことを呟いていた・・・
だってそうだろ！？高校に来て先生に呼び出されたと思ったら
この学校の男子生徒は俺一人って言われたんだぞ！！どこの
インフィ〇ットストラトスだよ！！

「しん君元気だしなよ～」

「他人行儀の様な言い方になるけど運が悪かったとしか・・・」

そう言って唯と真鍋さんは俺に声をかけて慰めてくれる、俺が
教室に戻って来た時「一体何事！？」の様な感じの顔で入って
来たらしい・・・

「で、でもさ、退学とかそんな悪い事じゃないんだし」

「何でも悪い方向に考えない方がいいわよ、余計気が滅入っちゃう
し」

「うん・・・そうする・・・」

確かにそうだ、こんなところでうじうじ言ってたって何か変わる訳でもない。せっかく友達と呼べる人が出来たのにこのまま別の学校に行くのも嫌だしな・・・

「ほら、そろそろ教室出ないと入学式に遅れちゃうわよ」

「あっ本当だ、しん君行こう！」

「おう、分かった」

そして俺達三人は教室を後にする、その間にも二人には「大丈夫だよ！」とか「しっかりしなさい」とか色々と元気づけてくれた中学時代の時とは大違いだなぁ・・・

なんて考えてるうちに体育館に到着した・・・までは良かったが目の前の光景に胃ドッと重くなった。

「見渡す限り女子・・・女子・・・女子・・・」

そう完璧に、完全に（俺を除いて）女子生徒オンリーだった・・・何かちらちらとこっち見てるし！ヤメテ！？俺のライフがゼロになっちゃう！？

「ではこれより入学式を始めます、初めに校長先生より入学のお祝いのお言葉を頂きます・・・」

そんな感じで入学式が始まった。

「ヴぁ～しんどかった・・・」

「何か・・・お疲れ様」

「しん君大丈夫？」

「これが大丈夫に見えると思う？」

「「いや、まったく」」

綺麗ナユニゾンデスネこんちくしょう！！

あの後どうだったかって？女子の目線が気になって気になって
落ち着いていられなかったわ！！校長先生は「余り気にせず
普通に接してあげてほしい」てな事言ってたけどそれ無理だろ
絶対に！！

「もう～言ったでしょ、考えても気が滅入るだけだって」

「そりゃそうだけどさ～」

考えちまうんです、はい・・・

「でも・・・」

「うん？」

「唯？」

「私達、これでもう高校生なんだね！！ちょっとドキドキ
しちゃうよ～！！」

そう言って唯が俺達二人に屈託の無い笑顔を向けてきた、
その顔に思わずドキッとする。

「唯は少しお気楽過ぎ・・・」

「え～そんな事ないよ？」

「・・・くくっ」

「？」

「しん君・・・？」

「くくくっ・・・ごめん・・・そんなつもりじゃ・・・
くくっ・・・はははっ！」

二人の会話を聞いてたら不思議と笑いが込み上げてくる、何てことない
普通の会話なのに俺の心はとても不思議な気持ちに満ちていた。

「野上君・・・ここ笑うところないわよ・・・」

「ひどいよ～しん君」

「だからごめんて・・・はははっ」

いままでなかったこんな気持ち・・・さっきまで考えてたことが急に馬鹿
らしく思えてきた。

「もう・・・まあそれじゃあ入学式も終わったことだし後は

帰るだけね」

「そうだね、あっ！しん君はどの辺りに住んでるの？」

「俺は隣町から電車で来たんだ」

「えっ！？そうなの？てっきりこの近くに住んでいるものかと・・・・」

「唯・・・別のところから来ている人はほかにもいるわよ・・・」

「あ・・・そうだった」

「まったく・・・でも野上君、なんでわざわざ隣町の此処に来たの？地元にも高校はあると思うけど」

「えっ！？それは・・・」

言いたくない・・・あの事はもう思い出したくない・・・そんな事を思っていると・・・

「の・・・野上君！？」

「しん君どうしたの！？顔が真っ青だよ！？」

「・・・はっ！？」

気づいたら俺は顔面蒼白で大量の冷や汗を流していた。

「ご・・・ごめん、大丈夫・・・後なんでこの高校を選んだのかって理由はあまり話したくないんだ・・・」

「私の方こそごめんなさい・・・あまり聞いちゃいけない話だったみたいね」

そう言うと真鍋さんは俺に謝った、何か俺のせいで暗い雰囲気にしちゃったな・・・

そんな事を思っていたら

「じゃあもう暗い話はなしにして・・・一緒に帰ろう！」

「「唯・・・」」

唯がまたあの笑顔で話しかけてくれた、心なしか俺の気持ちも落ち着いているそんな感じがした。

「・・・そうね、それじゃかえりましょうか」

「うん！しん君も途中まで一緒に帰ろう！」

「いいの・・・？」

「当たり前だよ！もう私達友達だもん！ねっ和ちゃん！」

「ふふっ・・・そうね」

友達だと当たり前のように言ってくれる・・・いままでそんな事なかったのにその言葉
一つ一つがとてもうれしく思えた・・・

「野上君～なにぼ～っとしてるの～」

「置いて行っちゃうよ～」

「えっ！？ちょっと待ってよ二人とも！？」

考えているうちに二人は先先と歩いていた、って言うか早すぎだろ
オイ！？
その後は三人で他愛のない会話を楽しんだ。

「澪〜〜〜一緒に帰ろうぜ〜〜〜〜！」

私の名前は田井中（たいなか）　律（りつ）今年この桜ヶ丘高校に入学した一年生！

「律、分かったからそんな大声で呼ぶのはやめてくれ・・・恥ずかしだろ・・・」

こいつの名前は秋山（あきやま）　澪（みお）私の幼馴染だ

「わりぃわりぃ、まぁいいじゃん」

「まったく律は・・・」

「そんな事より澪は見たか？」

「見たって何を？」

「決まってるだろ！この学校唯一の男子生徒の事！」

そう、初め入学式で聞いたときは驚いた。まさか女子高に男子生徒が入学してくるとは思わなかったからな〜

「今年から共学になったたって事ちゃんと中学校に伝わってなかったみたいじゃないか」

「そいつも不運だよな～周りはみんなじょしだらけだぜ？」

これば かりは同情するよな・・・

「だけどさ澪？」

「ん？何？」

「もしそいつに話しかけられたらどうするよ？」

くくくっ・・・澪は恥ずかしがり屋だからな～この言葉だけでどんな反応をするか
楽しみだぜ・・・

「えっ！？いや・・・どうすると言われても・・・私男の人と話すの苦手だし
ただでさえ・・・ぶつぶつ」

「もしかしたらナンパとかされたりして～くくっ・・・」

「ナッ！？ナン・・・！？」

「そうそう！「君の様な恥ずかしがり屋もまたっ！いい！！」とかさ～って
へぶっ！？」

「私をからかうな！ったく！」

澪に拳骨で頭を殴られました・・・痛い・・・

「くだらないことしてないでとっとと帰るぞ」

「えっ！？待ってよ～澪～」

私がうずくまっている間に澪はそそくさと先に行ってしまう、あ～もう！
薄情者～！

「薄情者で結構」

「心を読むな！」

そんなこんなで会話をする私と澪、でもまあ見たことない男子の事考えたって
しょうがないよな。いずれどっかで会うんだろうしな・・・

そんな事を考えながら私は、澪の後を追いかけて行った。

だがこの二人はいずれ思いもよらない形でこの男子生徒に会うということは
まだ想像もしていなかった・・・

ＬＩＶＥ２　まさかの一人・・・でも友達は優しいね（後書き）

いかがでしたでしょうか？律と澪はだしましたがまだムギが出ていません・・・

（ＬＩＶＥ１の冒頭に台詞だけは出してるけど・・・）次は必ず出しますので楽しみにしていてください。

さて主人公は軽音部のみんなとどんなつながりを持つのか！こうご期待！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6241z/

けいおん！あったかい日常

2011年12月25日02時45分発行